5月25日　中外日報　第3種郵便物認可

大阪・釜ケ崎を歩く

アーユス仏教国際協力ネットワーク

釜ケ崎の現状や支援活動への思いを語る本田神父㊧と白波瀬氏

本田神父と懇談

「人を人として」支援

アーユス仏教国際協力ネットワークは13日、日雇い労働者の街として知られる大阪市西成区の釜ケ崎地区でフィールドスタディー（現地学習）を行った。会員の僧侶ら26人が参加。地元に暮らし労働者の支援活動を続けるカトリックの本田哲郎神父らの話を通し、宗教者の役割を探った。

一行は地区内を歩き、本田神父が所属するフランシスコ会運営の「ふるさとの家」や、週2回炊き出しが行われる「三角公園」などを見学。その後、西成市民館で宗教社会学者の白波瀬達也・関西学院大准教授と本田神父から話を聞いた。

白波瀬氏は地区の歴史と宗教団体の支援活動について述べ、「1950～60年代までは仏教系団体も活動していたが、ここ40年の大きな人口の入れ替え、家族の流出で寺院もなくなり、今はキリスト教系の支援が中心」と説明。現在は生活保護受給者が9千人に上り、路上死は減っているものの、なお数百人のホームレスの生活支援や、労働者の「生きる意味」の問い掛けなどにどう答えるかが新たな課題とした。

地区に住んで26年になるという本田神父は、当初「宗教者として救い助けたい、提供したいと考えていたが、思い上がりだったと痛切に感じている」と表明。「最近祈らなくなった。宗教者としては堕落だが、祈って誰かが救ってくれるのか。宗教者としての発想を卒業しないと現実に困っている労働者の思いに応えられない」と話した。

「宗教を捨てること自体が信仰心ではないか」との参加者の問いに本田神父は、地区で活動するキリスト者のスローガン「人を人として」を挙げ「人として生まれた一人一人が大事だと。それこそ私たちが求める信仰の在り方だ」と応じた。

（飯川道弘）

の自立に

添う支援へ

東京YMCA（東京キリスト教青年会）は熊本地震発生から1カ月の14日、東京都新宿区の山手コミュニティーセンターで「熊本地震支援報告会」を開いた。熊本県御船町の避難所を支援した佐久間眞人・山中湖センター主任主事が被災地の

鍵に付けたライトや予備のメガネなど、普段から持ち歩く装備を説明する佐久間氏

る点や復興へ向けての課題を語った。

「自治体職員など現場の支援従事者も体力・精神力の限界」と指摘。「こと」と持論を語り、災害地に必要なのは住民、コミュニティーの自立であり、5年10年先を見越し、「地域の自立に寄り添う支援」への切り替えが必要になると述べた。

さらに阪神・淡路大震災後、全国紙の紙面から神戸の話題が消えた時

熊本地震の募金呼び掛け

立正佼成会「青年の日」大宮教会の子どもら

子どもたちが元気いっぱい募金を呼び掛ける声が駅前に響いた

立正佼成会の「青年の日」の15日、さいたま市北区の大宮教会は熊本地震の街頭募金活動を行った。子どもたちによる元気の良い「熊本地震義援金の募金にご協力お願いします」との声がJR大宮駅前に響いた。

駅前の公園に集合し、関口泰由教会長が訓示。強い日差しで子どもらの体力を考慮した1時間ごとの3交代で、100人以上が街頭に立った。日曜日ともあって人通りがく見られた。

総額55万4746円に達した募金は、同日に教会で行ったバザーの売り上げと合わせて全額、熊本県指定義援金口座に振り込まれる。

大宮教会では例年「青年の日」にユニセフ募金を呼び掛けていたが、熊本地震が発生したことから急きょ予定を変更。壮年部が子どもたちの見守りに立つなど教会が一つになって募金に取り組んだ。

実行委員長の秋元里佳子・同教会婦人部長は「募金を呼び掛ける子どもたちの姿が、多くの人に少しでも熊本に気持ちを向けるきっかけとなってほしい」と語った。

立正佼成会は毎年5月の第3日曜日を「青年の日」と定め、社会や国家、世界平和のための具体的な菩薩行実践を通した青少年育成を図っている。全国の教会でこの

葬儀式場装飾一式
御報次第遠方にても係員参上
りの如何なるご用命も承わります。
公益社
丸通三条下　☎075(221)4000(代)